

37-1 デイサービス

単身独居を支えるデイサービス

富家デイサービスセンター苗間

すずき さちこ

○鈴木 佐知子(介護福祉士), 望月 圭, 会田 優子, 飯島 晴美, 中川 利江子, 関口 正雄, 志村 祐美, 生方 康大

【目的】

高齢者人口の占める割合は年月の経過とともに増加の一途を辿っている。老老介護・認認介護が社会問題として取り上げられている中、2025年問題を迎えるにあたって国をはじめ自治体レベルでの医療、介護、福祉のほか様々な分野で課題を迫られている。高齢者の単身世帯においても増加傾向にあり、当施設においては利用者総数148名のうち、サ高住を除いた一般在宅世帯で34名が単身独居生活（23%）を送っており、うち25名が後期高齢者（74%）である。デイサービスは一般的に日常生活機能の維持・向上、社会性の再獲得、利用者や家族の身体的・精神的負担の軽減を目的とした介護保険サービス事業と認識されている中で、当施設が展開するサービスと先における方向性について報告する。

【方法】

単身独居生活を送る利用者を対象に認知機能、ADL、IADLをそれぞれ数値化したうえで生活レベルを検証、主観・客観での生活の様子に対し当施設が提供するサービス内容の重要性について検証する。

【結果】

単身独居生活を営む上で、「自身で食べることができる」「排泄の意識がある、排泄ができる」「自身で移動することができる」この3点については程度の差異はあるも共通して行える傾向にある一方、整容や入浴、更衣動作においては出来ない方、出来てもやらない方が多い。さらにIADLにおいては多数項目で支援を必要とされるなか、当施設で行う服薬確認や洗濯支援、朝食配達、環境整備支援はその人らしい生活のみならず、前途した老老・認認介護世帯においても求められる支援であると感じている。

【まとめ】

介護保険サービス事業において、一層介護の担い手が必要とされる中で「自立支援」の働きかけが注目される。出来ない、もしくは出来るけどやらないことを「出来るように」サポートすることがこれからの通所サービスに求められることと感じている。

37-2 デイサービス

デイサービス利用者の転倒予測 ～FBSと2StepTestとの関連～

1 富家千葉病院 リハビリテーション室, 2 富家リハビリセンター花見川

ことう いずみ

○後藤 泉美 (理学療法士)¹, 村越 大輝¹, 望月 建吾², 須賀 晴彦¹

【はじめに】

高齢者の転倒は骨折をはじめ、寝たきを誘発する可能性を有しており、バランス評価に関する転倒の先行研究は多い。しかし、デイサービス（以下：デイ）では時間的・空間的な制限からその評価を利用しにくい場面がある。そこで今回、短時間かつ狭い場所でも対応できる方法について検討し、より簡易的な転倒予測と評価時間の削減につなげることを目的とした。

【方法】

対象は当院系列のデイ利用者24名。被験者に対しアンケート形式にて、年齢、移動手段（補助具等）、1年以内（平成30年10月から令和元年10月まで）の転倒歴を調査した。転倒ありを“転倒群”、転倒なしを“非転倒群”の2群に分類した。また、療法士が身長、体重、FBS、2Stepstestを調査した。調査したFBSと2Stepstestの有用性の有無と、転倒歴との関連性について比較した。

FBSと2Stepstestを対応のあるT検定にて処理を行い、有意水準は0.05未満とした。なお、当研究に際して同意を得られた利用者のみとし、認知症、コミュニケーションの取れない者は除外している。

【結果】

転倒群：10名（男性5名/女性5名、年齢 81.3 ± 5.5 歳、身長 154.6 ± 8.7 cm、体重 50.9 ± 6.6 kg）。非転倒群：14名（男性5名/女性9名、年齢 80.9 ± 5.7 歳、身長 154.9 ± 10.1 cm、体重 51.3 ± 6.4 kg）。FBS、2Stepstestは、現在測定中であり、詳細は当日の発表を持って報告する。

37-3 デイサービス

デイサービスの利用終了者
～退所理由からの検討～

富家リハビリセンター花見川

もちづき けんご

○望月 建吾（理学療法士）

【はじめに】

富家リハビリセンター花見川（以下、デイサービス）では様々な利用者の方が来所されている。今回、デイサービスの利用終了になった理由を踏まえ検証し、報告をする。

【方法】

平成31年2月から令和2年3月までの期間のデイサービス利用者情報・中止理由を調査した。

【結果】

平成31年2月調査開始時より、デイサービスの総利用者は148名、利用終了者は58名、現利用者が90名となる。

介護度別の退所者は要介護Ⅰ 31% 要介護Ⅱ 24.1%

要介護Ⅲ 19% 要介護Ⅳ 8.6% 要介護Ⅴ 8.6%

要支援Ⅰ 3.4% 要支援Ⅱ 5.2%

終了理由として他サービス利用19名 転居【在宅】4名 転居【施設】15名 死亡退所12名

上記理由でデイサービスを終了している。

【考察】

デイサービスにおける役割として主に入浴介助、身体機能の維持・向上のためのリハビリテーションとなるが退所理由に関しては様々な結果となった。

終了理由として、他サービス利用、施設へ転居が中心に上がる。

利用終了者の過半数を占めるのが要介護Ⅰとなり、他サービスの利用によるものが中心となる。

原因として考えられるものはサービス内容の不一致によるものが要因の一つとして挙げられる。同様に身体機能の低下による在宅生活の継続が困難となった利用者が終了となるケース多く感じる。

今後の利用者獲得、退所者減少のための対策として利用前のアセスメントや提供内容のすり合わせの強化や今まで以上に利用者本人の状態に合わせたサービスの検討が必要となる。

また、各種介護度別の継続利用のためのアプローチが必要となる。

昨今ではデイサービスの細分化が進み、より広いニーズに沿ったサービスを提供する必要がある。様々な利用者のニーズを確認すること今後のサービスやリハビリテーションに関して課題を見出すことができた。今回の結果を元に今後の新規利用者の利用継続を向上していけるように取り組んでいきたいと考える。

37-4 デイサービス

いつまでも歩きたい
～ノルディックウォーキング導入へ～

特別養護老人ホーム四街道苑 デイサービス

とだ しょうご

○戸田 章吾 (介護福祉士), 阿部 秀子, 櫻井 真由美

【はじめに】

日々の生活の中で歩く事を意識している方は少ないと思います。

私たちは生活リハビリの延長としてウォーキングに着目し、体力維持や健康維持・気分転換やネイチャーも取り入れられる、ノルディックウォーキング（以下ノルディック）を導入した。ノルディックとは専用ポール2本を使用してスポーツ感覚で楽しみながら取り組めるウォーキングを指す。

【方法】

- ①対象：当デイサービス利用者で、杖を含む自立歩行可能な利用者
- ②期間：2019年5月～6月職員へノルディックの理解と体験会へ参加を促した
2019年7月～8月通所者への説明と試験的導入
- ③実施：1) 職員の理解：職員ミーティングや、実施する職員に体験会へ参加を促しノルディックへの理解を深めた。
2) 実施の準備：職員が興味関心を持ちレクチャーできる体制を整えた。
3) 資格取得：インストラクター資格取得にて、正しいウォーキングフォームやポールの使用法、レクチャー時の指導が効果的になった。
4) 実施：ご利用者にはポールを用いて、苑の外周や近隣の公園を楽しみながら歩いていただいた。
回数を重ねる毎に自然なフォームとなり、違和感なく実施することができ、かつ歩行距離も延長していった。
また、仲間意識が芽生える一面も垣間見られた。

【結果】

継続によりノルディックで効果が認められている、歩幅拡大・歩行の安定・姿勢補正をご利用者自身感じて頂けるようになった。「ポールがあると安心する」「デイサービスに来る楽しみが増えた」「歩く事が習慣になった」などの感想が聞かれた。

【結論】

ノルディックは体力維持や気分転換など、目的に関わらず楽しめるウォーキングです。身体機能の向上に加え、集団で行う事でウォーキング以外の時間でも仲間意識が芽生え利用者同士の関わりも増えました。これにより、デイでの楽しみ方も大きく膨らむ可能性を感じました。

37-5 デイサービス

デイケア利用者の満足度調査を実施して
～利用者の生の声から業務改善へ～

江藤病院

はらだ

○原田 ひろみ (介護福祉士), 藤田 光子, 大和 孝子, 由宇 教浩, 武久 洋三

はじめに

新病院で平成29年11月からデイケアを30名定員で開始し、平成31年3月に定員を40名に変更した。そこで、デイケアでの利用者様の現状を把握するために満足度調査を実施、そのアンケート結果から問題点を抽出して対策を検討することにした。その結果、改善を要する業務内容やデイケアの利用者本位のケアの充実と今後の課題を見出したので報告する。

方法

対象者：85名の利用者に満足度調査を実施

期間：令和元年11月5日～令和元年11月11日

結果

アンケート回収率100%、回答率82.4%だった。アンケートは6項目とし、最後にデイケアについての質問をした。送迎については平均で92.5%の方が満足との回答、リハビリは、平均で90.6%の方が満足とのことだった。レクリエーションは、未回答が32.9%、その理由は短時間利用者がレクリエーションに参加していない。食事についても同様だった。入浴は31.7%の方が利用がなく未回答だった。また浴室の環境整備についても同様で35.3%が未回答で入浴を利用していなかった。最後の質問には満足との回答が91.8%だった。その他、爪を切っ
て欲しいや職員の人数が少ない、みんながバタバタして忙しそう、リハビリの時間を長くしてほしい等の要望があった。

考察

満足度調査結果で6項目の質問から約80%の方が『満足』との回答だった。しかし、利用者の生の声では現状の業務改善の必要性を感じた。そこで、自由記載の①職員からの声かけが少ない、②挨拶がない、③職員がバタバタしているという意見に焦点をあて問題を解決する為には、職員の意識改革がなければ改善出来ないのではないかと考えた。さらに、デイケア利用中の過ごし方についても、個別を取り入れた企画をする努力が必要である。その為には、利用者が求めているケアに気付ける感性を職員が養い、日々の業務に活かすことが今後の課題と考える。